



特定医療法人社団

鵬友会 ニュースレター

鵬友会ホームページ アドレス
<http://www.hoyukai.org/>

第112号

発行:2015年8月15日

発行責任者:
特定医療法人社団 鵬友会
事務局長 池島 守



近江商人の三方よし

(売り手よし 買い手よし 世間よし)

新中川病院 事務部長 松田 隆

当院がこれからも、またそれ以上に患者様に向き合い、また地域により必要とされ続ける病院となるためにはどのようなスタンスをとるべきなのかを私は常に考えております。

私はビジネススタイルとして好きな活動理念があります。「売り手よし、買い手よし、世間よし、いわゆる近江商人の三方よし」の精神です。お客様に喜んでもらうことはもちろん、社会貢献ができてこそ良い商売であるという考え方であり、社会との関わりを重視するソーシャルマーケティングの基本だと考えています。信頼を得て商売を成功させるためには、私利私欲の為だけでなく、その地域のことを心から想い、地域に貢献することが必要であるという考え方、さらに社会貢献については、見返りを求めず人知れず行うことを美徳としています。諸外国では「WIN-WIN」の関係、売り手よし買い手よしまでは、需要と供給の関係でよくありますが、地域や社会まで巻き込み良しとするモデルはなかなか見当たりません。

第一に、これを病院側からの視点に当てはめると、私たち職員が常に現状に満足することなく、病院及び医療に対して日々改善見直しをおこない、また個々の資格に対する生涯教育(自己研鑽)を怠らないスキルの高い集団となる(売り手よし)、それによりまさに今、目の前におられる患者様及びご家族様に高い安心感と満足感を与える事が出来る(買い手よし)、これらを継続的に行うことで地域に必要とされる病院となる(世間よし)、このような病院になりたいと考えます。

第二に、患者様側からの視点に当てはめると、お

もてなしという言葉が話題になりましたが、これは英訳するとホスピタリティーです。この言葉の語源はホスピタル、まさに私たち病院の事です。私たちはこの言葉が流行語となるずっと以前から実践してきております。営利目的ではなくホスピタリティーの対価として収益となる。病院が患者様を選ぶのではなく、患者様に選んで頂ける運営、満足していただき、そして患者様の要望を超えるホスピタリティーを提供し続ける。そのような考えを取り入れ、患者様が満足する(買い手よし)、その顔をみて職員も満足する(売り手よし)、さらに地域社会の皆様にも満足していただける(世間よし)、その為には職員満足度が、患者様満足度の重要なポイントだと考えております。職員がイヤイヤ働いて、どうやって患者様に心からのホスピタリティーが提供できるでしょうか、患者様の満足を上げるためにはまずは、今まで以上に職員満足を得ることから進めたいと考えます。

世界の医療最先端グループにいる日本の医療技術ですが、2025年問題、少子高齢化問題と医療業界全体としては問題山積としております。しかしそんな時だからこそ鎌倉時代から続いている日本の地方商人の「先人の知恵」を拝借させて頂くのも一考ではないかと執筆させていただきました。尚、当院には、「ほうゆう訪問看護ステーション」「ほうゆう介護支援事業所」を併設しております。また法人内は「介護老人保健施設」もあります。介護保険関係の方には、患者様を利用者様、病院を事業所と読み替えて頂ければ幸いです。

第12回幹部研修会

平成27年7月24日、箱根ホテルの会議室に鵬友会の幹部職員56名が参集し、幹部研修会が開催されました。

開会の挨拶では、池島理事長が「これからお話を各施設長には、【法人内での連携】と【他施設との連携】を宿題として出しております。基本的には、患者さんを法人内で切れ間なくみていくことが患者さんのためであり、法人の今後の発展へと繋がります。《法人内外の連携をより一層強固にする》今日は、各施設長が具体的に説明してくれると思いますので、有意義な研修会になることを期待します。」と述べました。



池島 理事長

続く池島常務理事の講義では、今後の医療福祉の動きとして、国の財政赤字の状況を説明し、毎年、歳出総額の3割以上を占める社会保障費を抑制することが不可欠であると考えている政府の方針と2025年度問題を交えながら、今後の医療福祉の流れを解説しました。後半には、幹部職員に期待することとして【幹部職員行動基準10箇条】を示し、よりよい組織を作るための幹部の心構えを述べ、幹部職員を鼓舞しました。



池島 常務理事



末盛 院長

◆湘南泉病院【急性期一般病院】：末盛院長、麦倉副院長

まず末盛院長より、今年の4月、湘南泉病院に新しい常勤医師3名が加わり、常勤医師総勢14名（内科10名・外科2名・整形外科1名・放射線科1名）となったことと共に最新設備の充実により、診療能力が格段に上がったことを説明しました。連携に関しては、連携の背景にある要因として①横浜市の推進する地域包括ケアシステム②病床機能報告制度③地域包括ケア病床の運用④DPCにおける急性期の厳格化を挙げ、現在の連携の試みとして『病病連携・病診連携・病介連携』を具体的に述べました。その後、麦倉副院長より、湘南泉病院で力を入れている内視鏡部についての紹介があり、昨年度は検査内視鏡1079件、治療内視鏡203件の件数があったこと、現在では胃カメラは月～土曜日まで、大腸カメラは月～金曜日まで行っており、必ず5日以内に検査ができること、また、各治療内容を動画を交えながら説明しました。



麦倉 副院長

◆新中川病院【療養型病院】：福田院長

急性期病院である湘南泉病院が法人の中で一番の柱であり、柱が元気がなくなると、付属する施設も元気ではいなくなる、そうならないために、たくさんの医師が、それぞれの専門分野で活躍している湘南泉病院に患者さんを集約し、他施設へ裾野を広げることが必要である。特に療養型の新中川病院は、強い連携が大事である。また、理事長も含め、各施設長が結束していくことが、法人運営をするには大切なことであると述べました。後半には、短期計画として、古い建物をなるべくリニューアルして、さらに良い療養環境にし、病院機能評価を受けて病院機能を高める。長期計画では、当院と患者さんの受け入れ基準が似通った介護付有料老人ホームが増え続けていることに危機感を持っており、この現状を打破するには、老人ホームが受け入れない難病患者さんを診ていかないといけない。そのためには、次世代の人材を育てることを含め、全てをバージョンアップしないといけないと述べました。



福田 院長

◆横浜ほうゆう病院【認知症専門病院】：日野院長

横浜ほうゆう病院は、ご存知のとおり認知症専門というキャラクターがはっきりしている病院で、認知症の患者さん、特にBPSDの治療を主に診ています。連携面では、湘南泉病院へは合併症の治療、特に骨折・肺炎の患者さんを転院し治療して戻ってくる、新中川病院とは、病院の特長により、患者さんのやりとりは少ない状況です、阿久和鳳荘は、認知症の専門棟ができましたので、転院する患者さんが増えております。といった状況で連携しております。当院の経営面については、認知症に対応した施設が増えてきたこともあり、競合が激化しており、また認知症の患者さんも在宅へという方針が国から示されたこともあり、当院がどうやって生き残っていくか思案しております。と述べました。



日野 院長

◆阿久和鳳荘【介護老人保健施設】：根本施設長

今年4月に介護報酬の改定がありましたが、マイナス改定という非常に厳しい内容でした。介護老人保健施設は、在宅復帰率【従来型（在宅復帰率30%以下）・支援加算型（在宅復帰率30%超）・在宅強化型（在宅復帰率50%超）】の達成いかんによって報酬単位が大幅に違っており、従来型の当施設は、厳しい状況です。現在は支援加算型取得に向けて、職員一同取り組んでおります。連携の面では、職員間や利用者様とのコミュニケーションや信頼関係がうまくいっていない所があると思います。今日はこの機会に、違う施設の方々や他部署と交流を深めてもらいたいと思っております。と述べました。



根本 施設長